



# 六花 4

俳句雑誌りつか  
2018（平成30年）  
cover design ichigo

山田六甲

道

寒月の水をつかめと甘えけり  
水心たつぷり寒の鯉を呼ぶ  
白息にまじり言玉出かけしよ  
山焼の炎に山のめくれゆく  
春虹を見よとまさこの一大事  
いくたびも曲げてきしこの臥龍梅  
泥に尻汚れてゐたる春の鴨  
田鼠化して砂を浴ぶ駕  
薔薇色ノ岩塩ヲ振ル彼岸カナ  
春風やもとより笑ふ羊の眼

3月22日17時55分受電

芽吹く風雌岡山に降り来たる  
大山寺田打桜の夜ひらく  
雀来て遊ぶところの暖かし  
末黒野や靴底に釘ぐすと踏む  
蛤の年輪爪に数へをり  
いかがはしきは罰せず闇の沈丁花  
さざなみに映れる黄泉の桜かな  
花吹雪煉獄にきて渦巻ける  
楽々鶴の上撰原酒さくら咲く

3月19日 五十昭

寒月の南の窓に移りけり  
病窓のまだ明けやらず寒卵  
寒鯉の一つ離るる早さかな  
寒晴や浜に漁網の干されゐて  
藁苞の裾に風あり寒牡丹  
さざ波に洗はれてゐる初氷  
高々と注連飾せし御輿庫  
二日目の浮足立てるいかのぼり  
俎に菜の切れはしや七日粥  
想はねば遠ざかるなり初山河

高華抄

初写真

佐津のぼる

年はじめいまさら期する何もなし  
初鏡鬢の白髪のいつよりぞ  
いとけなき御慶に正す膝がしら  
年始客相変らずの孫自慢  
養生に専念せよと賀状来る  
初御空鳶が争ひ穢したる  
初風呂に癒えぬ瘦軀を沈めけり  
初写真家族の端に犬坐る  
二日はや遠き任地へ子の帰る  
にんげんのことばで鸚鵡御慶のふ

# 風花の触れし露座仏またたけり

升田ヤス子

鴨の水尾ま昼けだるき沼を裂き  
煤逃げの法話を聞きに行かれけり  
わが指の腹より柔し花びら餅  
風呂敷のやさしき年始廻りかな  
掻き上げてあまる児の髪初湯かな  
大玻璃の月煌々と二日更く  
くこの実を点晴として齋粥  
風花の触れし露座仏またたけり

かざはなのふれしろざぶつまたたけり ますだやすこ

風花とは晴れているのに雪がちらつくこと。その雪。また、香奠や祝い袋の中身が空のこと。お金が入ってませんでしたよ、と言うのは無粋。うっかり入れ忘れることもあるが、大方は「懐不如意にてごめんそうらえ」という意味であるから、黙っているのが風流人。風流を通すのは結構辛い……。露座仏というのは屋外の仏像で、大きなものでは鎌倉の大仏。この句は鎌倉ではないと思うが、風花が臉を掠めたのであろう。その瞬間石仏の眼がまたいたように感じたのである。臉の前を素早く動く物があるときのように感じることもある。風花が修行中の仏様の気を散らしたのである。

裏白の羽ばたきながら売られけり 志方 章子

金粉の降りてきさうな冬の雲

大服を干し一年の始まれる

行く年のふはりと交す握手かな

お健やかならむ天皇誕生日

弁慶の鐘や即ち除夜の鐘

湯豆腐の湯気の隔てる二人かな

裏白の羽ばたきながら売られけり

道端に裏白だけを買ふ女

うらじろのはばたきながらうられけり しかたあきこ

「売られる」という言葉は昔の貧しい農村の悲劇を連想させるが、正月を迎える飾りに使うのだから、楽しそうに羽ばたいている鳥のようにも思え、目出度い飛翔と捉えれば玉の輿に乗るようで明るく未来を示しているのが共感できる。買い手が裏白だけを買うのは、三宝の敷物や注連飾りに少しでも瑞々しい裏白を使いたいからである。

雪卿集 せつけいしゅう

升田ヤス子

出口 誠

鴨の水尾ま昼けだるき沼を裂き

左からイヌ・ヒト・ネコのふとんかな

煤逃げの法話を聞きに行かれけり

冬麗を切り抜いてをり黒き屋根

わが指の腹より柔し花びら餅

二人して同じ病のふとんかな

風呂敷のやさしき年始廻りかな

雪の日の燈籠に火の灯りけり

掻き上げてあまる兎の髪初湯かな

雲を切り冬の日ざしが窓にさす

大玻璃の月煌々と二日更く

冬の昼病も我を愛しけり

くこの実を点晴として齊粥

訓練のすすむ阪神震災忌

風花の触れし露座仏またたけり

体温に一喜一憂冬の部屋



永田万年青

藤生不二男

明けて来し雲の隙間の初日かな

裸木の雨に濡れゐる肌かな

初詣牛歩のつづく門の外

水鳥の水尾のあかるき湖北かな

見返しに幸と書く初日記

大楳に早々と火のまはりけり

舟べりに消えてゆきけり鴨の水尾

お降りにしばらく濡れてゐたりけり

寒波かな群れたる鳩の石と化し

寒鮒や時折かむる泥けむり

白鳥の番ひすまして離れ行く

行く船の水脈を飛び交ふ冬かもめ

百合鷗鴨の撒餌を奪ひたる

日脚伸ぶ土手をまろべる遊びかな

傘打つてたちまち消ゆる霞かな

銃声に群れを離るる鴨一羽

志方章子

金粉の降りてきさうな冬の雲

大服を干し一年の始まれる

行く年のふはりと交す握手かな

お健やかならむ天皇誕生日

弁慶の鐘や即ち除夜の鐘

湯豆腐の湯気の隔てる二人かな

裏白の羽ばたきながら売られけり

道端に裏白だけを買ふ女



# 雪樹集

住田千代子

参道の脇が吉なる酉の市  
けなげにも冬の桜の咲き満てる  
注連を縷ふこつの掴めぬままにかな  
注連飾雀寄り来て福とせり  
門松の華やかに縄結はれたる  
子の相手いろは歌留多のちりぬるを

廣畑 育子

冬落暉駅のホームのまばゆかり  
目に溢る冬の日差しの大路かな  
行く年の白き沖かな滲じるし  
蒼天の鏡池なり鴨の水尾  
枯葦に水尾を残して隠れけり  
升酒をぐつと飲み干す酉の市

谷口 一献

水脈歪む枕の下の宝船  
シエイクして注ぐ金箔年酒かな  
一番福開門するや淑気充つ  
御守の紅の鼻緒や残り福  
月青し太古の闇の寒詣  
古寺の深き庇に日脚伸ぶ

平居 滯子

軍艦の滯吾子の名に初菝  
初鴉水脈ひくものを視野に入れ  
木々枯れて明るき山路とはなりぬ  
雪の乗る鳥居の松を納めけり  
湯に放つ七草みどり土の香す  
つのりくる寒さに家路遠きかな

赤松有馬守破天龍正義

多聞寺やももけてゐたる枇杷の花  
裸木に見つめられぬる夕散步  
淡雪のちろちろちろり散華かな  
城垣にへばりつきたる冬の苔  
薄氷の濠半分を覆ひけり  
曇天や薄氷滑る鴨の足

田尻 勝子

騒ぎ立つ鳥落せる燕かな  
赤銅色の月出でて一月尽  
下見たらあかん団栗拾いそう  
寒月の真向ふ雲を駆けぬける  
大寒波愛する人の多すぎて  
西郷どんの寝た畳かや寝正月

溝淵 弘志

マスクしてマスクした人車押す  
看板の等身大の寒さかな  
歯を磨く窓ガラス越し舞ふ小雪  
冬の波地球は怒り狂ひをり  
あの人の忘れ手袋握りしめ  
七種や四種集めて粥啜る

延川五十昭

冬雲の黄金に染まる稲美かな  
初夢は黄金色の鯉を抱く  
幼な子の飴しやぶる手や酉の市  
丹波路の名うての酒の寒造り  
酒蔵の桶に投げ入れ実南天  
酒蔵や屋根より落ちる雪の音

# 蛩雪譚

弥生作品から

くこの実を占餽として齋粥

升田ヤス子

齋粥は七草粥で春の七草を刻み込んだ粥。齋（ぺんぺん草）はどこにでも生じる春の七草の一つで、若苗を食用にする。かつては冬季の貴重な野菜であった。中国の故事では、「世を捨てて暮らしている人のために齋は生じた」と言われている。一方、「伊豫の人間が通った跡には、ぺんぺん草も生えない」と揶揄されると母から聞いた。伊豫出身の人間としては、言い当てられている様な気がする。点晴とは「画竜点睛」などのように、白龍を描いてその瞳（晴）を書き込んだところ、たちまち風雲生じて白龍は天に昇ったという

故事を踏まえて完成したという

意味。くこの実がその瞳にあたる。くこは不老長寿勢力倍増、見逃すなかれ。

舟べりに消えてゆきけり鴨の水脈

永田万年青

「舟べり」ということは聞いて、思いだした。加古川市の偉大な俳人松岡（栗本）清羅が詠んだ「舟ばたや履ぬぎ捨る水の月」を連想した。つまり万年

雪の日の燈籠に火の入りけり

出口 誠

雪の夜の灯籠に火が入って、美しい景色が生まれた。雪深い所では、雪を掘って火袋を造り灯りを点してあるのは趣のあるもの。燭の趣は谷崎潤一郎が『陰翳礼賛』にくどくどと延べている。ただし、雪国の人はそうは思わないかも知れぬが。

可能性が大きいと思うのだが皆さんいかがだろう。今やワンコイン句会の監督として大人気である。そうそうコーチの赤ちゃんも大人気。ついにワンコインブームが来ている。「船団」の若手ナンバーワン晴美さんが「川柳研究会」のようなものをはじめたという。

六<sup>り</sup>花<sup>っ</sup>集<sup>か</sup>  
集<sup>し</sup>  
集<sup>や</sup>  
集<sup>う</sup>



卯月到着順

善野 行

初旅は三兄弟の三夫婦  
残雪の空へとひかる山河かな  
雪吊の間近に見たる太さかな  
水鳥の水脈のしづかに消えにけり  
万両や妣植ゑしより二十年

延川 笙子

望月を眺め寒さを友とする  
中天にきりりと締る寒の月  
氷雨かな竹林雀の影も無し  
雪雲の後追ひかけて日暮たり  
日あたれる山の麓の猫の恋